



企画展『太平洋戦争時の日本商船～神戸高等商船学校と梅木信子の願い～』および関連事業

野村, 昌孝
菊地, 真

(Citation)

海事博物館研究年報, 53:2-7

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504876>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504876>



企画展 『太平洋戦争時の日本商船～神戸高等商船学校と梅木信子の願い～』 および関連事業

館長 野村 昌孝
副館長 菊地 真

太平洋戦争後80年の節目の年に当たり、本展示を企画した。先の戦争では広大な海域が戦場と化し、戦時下で軍に徴用された商船の多くが戦没し尊い人命が失われた。神戸で船員教育を担ってきた神戸大学大学院海事科学研究科・海洋政策科学部（旧神戸商船大学）の前身である神戸高等商船学校でも、戦争で船と命運を共にした卒業生が数多くいる。敗戦後の日本は復興を遂げると共に、悲惨な戦争を二度と起こさないと誓い、本学も今日に至るまで、平和な時代の海運を担う若者たちを輩出することに努めてきた。

そこで今回の展示は、太平洋戦争で商船がたどった歩みを振り返り、戦争への教訓を新たにすると同時に、これからの海技者教育のあり方を考える機会と位置付けた。また夏季には、今年度もタオルアニマルのワークショップを開催した。ご協力を頂いた上杉恵美先生に感謝申し上げます。



企画展ポスター、企画展風景





企画展の展示風景

I. 企画展の概要

1 商船の徴用と戦没

日本の商船隊は、交易にともなう人や物の輸送と情報の伝達を一手に担い、昭和初期までに世界第3位の船腹量を誇っていた。太平洋戦争が始まると、徴用船として幾多の戦場との間で兵士や軍属、民間人、傷病者や捕虜、軍需品や支援物資などを輸送し、さらに本土へは膨大な量の資源を海外から運び込むなど、多岐にわたる役割を果たした。けれども輸送の重要性にもかかわらず、戦況の悪化に連れて手薄な護衛や運任せともいえる運航を強いられ、多くの徴用船が潜水艦や航空機により海の藻屑と化した。

2 戦没した徴用船と山田コレクション

太平洋戦争では、いわゆる商船、機帆船、漁船が戦地に徴用され、少なくとも7,240隻が失われた。徴用船と運命を共にして戦没した船員は約6万人を数え、当時の日本人船員の49%に当たると言われる。展示では太平洋における商船の主要な戦没地点を地図にあらわした。また戦前の商船の克明な記録である「山田早苗コレクション」を公開している。太平洋で喪失した元民間船の位置や数から、戦争の悲惨さが実感できる。

3 戦争と神戸高等商船学校

第一次世界大戦末期の1918（大正7）年に創立された私立川崎商船学校は、1920年に官立神戸高等商船学校になり、高等船舶職員（高級船員）教育を本格化させた。当時、国は船舶職員を予備兵力として確保するために海軍予備員令を採用しており、卒業すると同時に学生を海軍の予備少尉・予備機関少尉に任用した。

神戸高等商船学校は、1945年の神戸空襲で学舎のある深江一帯が爆撃を受けたことにより校舎を焼失した。学校の練習船であった進徳丸も瀬戸内海で空襲に遭い、搁座している。太平洋戦争で戦没した卒業生は約800名を数える。

4 梅木信子の願いと未来の海技者教育

兵庫県に住んでいた渡邊信子氏は、神戸高等商船学校生の梅木靖之氏と出会い将来を約束していた。ところが、1943（昭和18）年10月22日の早朝に靖之氏が機関少尉として乗っていた海軍特設運送船栗田丸が東シナ海で米潜水艦の攻撃を受けて沈没した。

信子氏は靖之氏の死後、籍を入れ梅木信子となり、戦後は医師として長く地域医療に携わられた。また戦時中の自身の体験から、神戸商船大学、更には神戸大学大学院海事科学研究科・海事科学部（現・海洋政策科学部）に対して多大な支援を尽くされ、海事科学の振興に資する海技者育成のため、梅木信子奨学会と梅木靖之記念財団の2つの基金を設立された。氏のご厚意に感謝し、深江キャンパス内の共用施設が梅木Yホール・Nホールと命名され、教育研究活動や市民セミナーなどに活用されている。

Ⅱ. 関連事業について

1. ワークショップ

今年度も子供向けの夏休みワークショップを企画し、タオルアニマルづくりとロープワーク体験を実施した。ロープワークは夏季休館に入る前の7月28日（月）、7月30日（水）、8月1日（金）、8月4日（月）、8月6日（水）に、開館時間内に随時受け付けた。



ワークショップ風景（タオルアニマル、右下はロープワーク）

「タオルアニマルを作ろう～客船のサービスに親しむ～」

タオルアニマルのワークショップは、8月4日（月）と8月8日（金）の2日間、各回とも午後2時30分～3時30分に開催した。タオルアニマルは海外のクルーズ船などで実施されているサービスであり、クルーズ船ではイベントとして、タオルアニマルの折り方教室もしばしば行われている。日本の客船で行われてきた花毛布の船内サービスと共通する。

今年も上杉恵美教授（明海大学）に講師をお願いし、8月4日の第1回目に上杉先生に加え、明海大学の上杉ゼミの学生4名、神戸大学の学生3名で実施した。第2回目は菊地を講師とし、学生5名と野村、三輪が補佐した。ワークショップはまず導入部で、上杉先生が作成・監修したスライドで船内サービスの歴史をたどり、日本の花毛布、次いでタオルアニマルについて紹介を行った。

作業は解説シートに基づいて講師が作り方を実演し、タオルを配って参加者各自がタオルアニマルづく



ワークショップのチラシ

りに挑戦した。作り方として「ペンギン」「イヌ」「ゾウ」「スワン」を用意し、子供たちの進み具合や反応をみながら、各回に3～4種類を作成した。今回は2回とも低学年以下のお子さんが多く、バスタオルを折ったり巻いたりする際に手が届かないケースが認められた。作ったタオルアニマルはテーブルに集め、適宜子供たちと撮影をした。また最後に、講師から参加者に感想を聞いてまわり、船と縁の深いタオルアニマルというサービスの仕方を覚えて、家族や知りあいにも、おもてなしの心を形で表して欲しい旨をお伝えしてワークショップは終了した。

当日の参加者は、1日目が子供と保護者を合わせて20名、2日目が6名の総計26名であった。子供は小学1～2年生が多かったため、サポート役の学生が子供に貼り付いて指導する形となった。この点は今少し工夫が必要と考えられる。

2. 市民セミナー

第15回海事博物館市民セミナー（令和7年度神戸大学大学院海事科学研究科公開講座）を「太平洋戦争時の日本商船」と題して、総合学術交流棟1階・梅木Yホールにて開催した。講演は「戦没した船と海員の資料館について」岡村世紀一氏、「神戸高等商船学校と梅木信子の願い」矢野吉治氏である。岡村氏は、戦没した船と海員の資料館の開設に関わり、活動を長らく続けて来られた。そこで、戦争で犠牲になった船と海員を追慕するこの施設の歩みをご紹介いただいた。矢野氏は元神戸大学大学院海事科学研究科教授であり、生前の梅木信子氏と親交もあったため、商船学校の歴史を踏まえつつ、梅木ご夫妻の事績をご紹介いただいた。好評のうちに終了し、講師の先生方に感謝申し上げる。当日の講演内容は本誌に掲載した。

なお当日11時から13時前まで博物館を特別開館し、来聴者に企画展を見学いただいた。

- ・開催日時：2025年11月22日（土）13時20分～16時40分
- ・受講者：83人
- ・実施概要

11：00～12：40 海事博物館臨時開館（自由見学）

- 13：20～14：50 講演1「戦没した船と海員の資料館について」
岡村 世紀一（戦没した船と海員の資料館）
- 15：05～16：35 講演2「神戸高等商船学校と梅木信子の願い」
矢野 吉治（元神戸大学大学院海事科学研究科教授）

講演受付時に参加者へアンケートへのご協力をお願いした。アンケート回答数は56で回収率は67%であった。設問Ⅵの『テーマと内容の満足度』において「ふつう」以上の回答が55人・98%であり、他の回答を含み、概ね良好な回答を得た。

【アンケートの設問と回答状況】

設問1：受講者年齢

- ・20代：5%、40代：2%、50代：18%、60代：36%、70代以上：39%

設問2：セミナーの参加回数

- ・初めて：68%、2回目：9%、3回目：7%、4回以上：16%

設問3：セミナーの認知

- ・神戸大学のwebページ：25%、海事博物館のwebページ：18%
- ・知人・友人の勧め：13%、セミナー紹介のチラシ：34%、その他：11%

設問4：セミナー参加の動機

- ・教養を高める：9%、テーマと内容に興味あり：84%、自分の専門に役立てる、周囲に勧められた、毎回参加している、その他：各2%

設問5：セミナー案内のチラシについて

- ・わかりやすかった：54%、普通：43%、分かりにくかった：2%、見ていない：2%

設問6：テーマと内容の満足度

- ・大いに満足：32%、満足：46%、普通：20%、満足できない：2%

これまでに開催した海事博物館市民セミナー（大学院海事科学研究科公開講座）は次のとおり。

- 2007年度（第1回）「高田屋嘉兵衛と北前船」
- 2008年度（第2回）「神戸と近代日本商船隊」
- 2009年度（第3回）「博物館資料と戦時徴用船」
- 2010年度（第4回）「海路図や絵巻から見る江戸時代の海路の賑わい」
- 2011年度（第5回）「大航海時代から人工衛星まで-航海術と計器の発展-」
- 2012年度（第6回）「船の推力発展史-人力・風力から未来へ-」
- 2013年度（第7回）「進水絵葉書に見る船の変遷-船舶の過去から現在-」
- 2014年度は開講せず（企画展「船舶模型から学ぶ人・海・船-海運の過去・現在・未来-」
- 2015年度（第8回）「大戦中の日本商船 船員の姿」
- 2016年度（第9回）「神戸における海技者教育100年の歩み（前編）」
- 2017年度（第10回）「神戸における海技者教育100年の歩み（後編）」
- 2018年度は開講せず（日本遺産追加認定記念トピックス天展「和船の活躍した時代」
- 2019年度（第11回）「和船の活躍した時代」

2020年度はCOVID-19のため開講せず（小企画展「戦後75年太平洋戦争と船員」「和船の活躍した時代」）

2021年度はCOVID-19のため開講せず（企画展「ふね遺産進徳丸」）

2022年度（第12回）「ありがとう進徳丸・深江丸」

2023年度（第13回）「近代日本船のあゆみ～多種多様な船とその役割～」

2024年度（第14回）「神戸からの船出」



基隆港外にて被雷沈没する
「高千穂丸」



船尾付近に被爆した
「ぶえのすあい丸」



沈みゆく本船に別れを告げる
「関西丸」の乗組員



遭難した米軍機の乗組員を救助する
「北陸丸」の乗組員



沈没を目前に日の丸をあえて掲げる
「瑞穂丸」



筏で漂流する乗組員を救助する救命ボート
「船名不詳」



日本郵船の富士丸を救助する
「鴨緑丸」の乗組員



沈みゆく本船から少女を救出
する乗組員「船名不詳」



猛炎に包まれたブリッジ（船橋）
「船名不詳」



船と運命を共にした「ぶら志る丸」の大野船長

館内正面に企画展示の絵画10点について

大阪商船株式会社長の岡田永太郎氏は自社の船と船員が次々に犠牲になる様子を胸を痛め、徴用船の最後の姿を記録に留めようと、生還した船員諸氏からその様子を聞き取り、嘱託画家の大久保一郎氏がキャンパスに書き残した。戦後長らく行方がわからなくなっていたが偶然発見され、現在37点が修復されて(株)商船三井が保管し、日本殉職船員顕彰会が巡回展示などを行う。2015年の第8回企画展「大戦中の日本商船 船員の姿」に続き、画像データをお借りして展示した。